



先生との絆

※体験版

目次

第一章：遅刻の呼び出し

第一章：遅刻の日常と呼び出し

奈々子は、クラスの中でもひとときわ明るい存在だった。いつも笑顔を絶やさない彼女は、国語の授業が特に大好きで、先生の話をも熱心に聞き、ノートを取る姿が印象的だった。

周囲の友達からも「奈々子はいつも元気で可愛いよね」と評判で、クラスのムードメーカーとして欠かせない役割を果たしていた。

しかし、そんな彼女には誰にも相談しにくい、大きな悩みの種があった。それは、根深い遅刻癖だ。

朝が極端に弱く、毎日のように学校に遅れてしまうのだ。

奈々子の朝はいつも同じパターンで始まる。アラームをセットしていても、鳴り始めると無意識にスヌーズボタンを連打してしまう。

目が覚めても、「あと5分だけ……。」と自分に言

い聞かせ、二度寝に陥る。

気づけば8時を過ぎていて、慌てて飛び起き、顔を洗い、制服に着替え、トーストをくわえて家を飛び出す。

駅までの道を全力で走っても、始業のチャイムに間に合うことは稀だった。

最初のうちは「電車が遅れたんです」「お腹が痛くて」と教師に言い訳を並べていたが、最近ではそれ

も通用しなくなっていた。

特に、担任の山中美香先生には完全にバレてしまっているようだった。

美香先生は 28 歳の音楽科教師で、合唱部の顧問を務めている。綺麗な黒髪をなびかせた知的な容姿は、生徒たちから「クールビューティー」と陰で呼ばれていた。

彼女の授業は厳しく、規律を何よりも重視するス

タイトルで知られていた。特に遅刻に対しては容赦がなく、遅刻した生徒には必ず個別に指導を入れる。

山中先生自身、学生時代に似たような遅刻癖があり、当時の担任から厳しい叱責を受けた経験があった。その経験が今の厳格さを生んでいるのかもしれない。

彼女は教師として、生徒の将来を真剣に考え、甘やかすことを許さない信念を持っていた。

ある朝も、奈々子はいつものように遅刻してしまった。時計は 8 時 35 分を指し、ホームルームが始まってすでに 10 分以上が経過していた。

教室の後ろのドアをそっと開け、忍び足で自分の席に向かおうとしたその瞬間、教壇に立つ美香先生の鋭い視線が奈々子を捉えた。

クラス中が一瞬静まり返り、奈々子は凍りついたように立ち止まった。

鞆を抱えたまま、息を潜めて周囲の視線を感じる。

友達の怜子が心配そうにこちらを見ているのが分かったが、奈々子は目を合わせられなかった。

「佐藤さん。そこに立ったままでいいわ。」

美香先生の声は静かだが、冷たい響きがあった。

奈々子はゆっくりと教壇の方を向き、うつむいた。

クラスメイトたちの視線が痛い。美香先生は教壇からゆっくりと降り、奈々子の前に立った。身長は

ほとんど変わらないのに、その存在感は圧倒的で、
奈々子は小さく縮こまった。

「今月、これで5回目ね。どういふことかしら？」

奈々子は唇を噛み、必死に言い訳を探した。

「すみませんでした……本当に、今日は電車が遅
れてしまって……。」

「言い訳は聞き飽きたわ。電車の遅延証明書はあ

るの？」

奈々子は首を振るしかなかった。本当の理由は二度寝だったが、そんなことを言えるはずがない。

美香先生はため息をつき、眼鏡の位置を直した。

「あなたはクラスでも明るくて人気者よ。でも、遅刻を繰り返すのは周囲に悪影響を与えるわ。みんながルールを守っているのに、あなただけが特別だと思うの？」

奈々子は胸が痛くなった。確かに、友達にも「また遅刻？」とからかわれ、担任の先生に叱られるたびに自己嫌悪に陥っていた。

家に帰ってからも、鏡の前で「明日こそは！」と誓うのに、翌朝になると同じ繰り返し。ストレスが溜まり、夜眠れなくなることさえあった。

美香先生はさらに続けた。

「放課後、音楽室に来なさい。鍵をかけるから、

誰も来ないわ。そこでちゃんと話しましょう。指導
が必要よ。」

その言葉を聞いた瞬間、奈々子の心臓が激しく鳴
り始めた。

音楽室は校舎の最も端にある、古い棟の3階。放
課後になれば生徒も教師もほとんど寄り付かない、
静かな場所だ。

しかも防音設備が完備されているため、外の音は

一切入らず、まるで孤立した世界のように。

——何をされるんだろう。叱責だけ？それともも
っと厳しい罰？

奈々子の想像が膨らみ、授業中も集中できなかった。
残りの授業時間は永遠のように長く感じられた。

次の授業は奈々子の好きな国語の時間だったが、
先生の話が耳に入らず、ノートは白紙のまま。

隣の席の友達が

「どうしたの？ 顔色悪いよ」

と声をかけてきたが、奈々子は

「大丈夫」

と笑顔を無理に作った。

頭の中では、美香先生の冷たい瞳と「鍵をかける

から」という言葉が何度もリプレイされていた。

放課後のチャイムが鳴った瞬間、奈々子は鞆を抱えてゆっくりと教室を出た。廊下を歩く足取りが重く、階段を上るたびに息が苦しくなる。

音楽室の扉の前まで来ると、深呼吸を繰り返し、ようやくノックした。

「入っていいよ」

美香先生の声が中から聞こえた。奈々子は震える
手でドアを開けた。

空気は少し埃っぽく、独特の静けさが漂っていた。

美香先生は窓際に立って外を見ていたが、ゆっくりと振り返った。

「遅かったわね。座りなさい。」

奈々子は言われるままに、一番前の椅子に腰を下

ろした。美香先生はゆっくりと近づき、奈々子の真
正面に立った。

距離が近く、先生の香水の匂いがかすかに漂う。

「佐藤さん。あなたはクラスでも目立つ子よ。明
るくて、勉強もできる。でも、遅刻を繰り返すのは
教師として……いえ、人として許せないわ。ルール
は守るためにあるの。あなたが守れないなら、指導
が必要よ。」

奈々子はうつむいたまま、小さく頷くしかなかった。心の中で反省の言葉が渦巻くが、声に出せない。

美香先生の視線は厳しいが、どこか優しさも感じられた。

「言葉だけの謝罪は何度も聞いてきた。でも、あなたは変わらない。だったら、もう言葉では済まないわね。昔ながらの方法で、身体に覚えてもらう。それが今日の指導よ。」

奈々子は息を呑んだ。まさか、そんな時代遅れの罰が今時あるなんて。心臓の音が耳に響く。

美香先生の目は本気で、冗談ではないようだった。奈々子は立ち上がり、先生の前に立った。膝が震えて、立っているのもやっとだ。

これから何が起こるのか、想像するだけで怖かったが、逃げ出すことはできなかった。